

二〇二二年十二月の交流会で、すべてのイベントを終えたJOES Davos Next 2022。現在、運営委員会と事務局では、今回の検証と次回に向けての検討が進んでいます。

その一環として実施されたインタビューから、参加者、保護者、教師、そしてファシリテーターの声の一部をお届けします。

(只木良枝)



参加者の声から

あつと言う間だった講演

「山中教授の話の聞けるなんてすごく貴重な機会」(中2)、「これは絶対に参加したいと思った」(学校で参加した日本人学校教師)と待望して迎えた山中伸弥教授の基調講演は、「あつと言う間に時間が過ぎた」「録画でも迫力があつた」と、期待通りだったようです。

子どもといっしょに講演を視聴した保護者からは「子ども向けにわかりやすく工夫して話されていた、私も勉強になった」「大学の勉強だけでなく、すべてのことが

その後の成功に通じているというお話が印象的だった」「何でもやってみるといずれつながら、興味あるものにのめり込みなさいというアドバイスは、まさにその通りだと思いました」などの声が寄せられています。

講演のあとに直接質問に立った子どもたちは、山中教授の気さくでユーモアあふれる人柄に触れて、ちょっと驚いたようです。質問した生徒を横で見守っていた日本人学校の教師は「ふだん冷静な子が、あんなに緊張しているのを初めて見た。人生の転換点になるような経験だったのでは」と語っていました。

違う視点との出会い

グループワークでは、さまざまな出会いがありました。

「母が医師で、たいへんなのを見ていたので『私には無理』と思っていたけど、偶然グループのなかに医師になる夢を持つ子がいて、その話を聞いているうちにやはり医師もいいなと価値を認識した」「自分の夢に対してほかのメンバーからコメントをもらって、思わぬ視点に気づかされた」

最初は緊張した学年や年齢の違いも、回数を重ねるうちに気にならなくなっていくようでした。

ファシリテーターのひとり、子どもたち同士が自発的に協働しながら議論を進めていた様子を話し、こうつけ加えています。

「私から見れば子どもたちは違う世代。『教える』モードになっちゃってしまうのではないかと思っていましたが、子どもたちの発言から学ぶことも多く、いっしょにディスカッションできました。この経験は、将来私が違う世代の人たちといっしょに一つの課題を考えていくときに、きっと生きてきます」

世代が違う人々との協働は、まさにこれからの世界の課題解決にとって不可欠なこと。それを参加者のひとりであるファシリテーターが感じ取っているということに、JOES Davos Nextという新しい学びの場の価値と可能性を実感しました。

もちろん、講演会の時間配分やグループワークの日程、進め方についての意見や要望もたくさん寄せられています。運営委員会と事務局ではそれらを検証し、Davos Next 2023の企画を進めているところです。